様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００３４７

研究課題名（和文）日本植民地期の台湾におけるハンセン病文学に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Basic Research on Leprosy Literature in Taiwan during the Japanese Colonial Period

研究代表者
星名　宏修（HOSHINA, Hironobu）

一橋大学・大学院言語社会研究科・教授

研究者番号：００２８４９４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は日本植民地統治下の台湾で創作されたハンセン病患者の文学創作を考察するものであり、最も重要な資料である『万寿果』を収集し、その分析を行った。日本内地のハンセン病文学と同じように、入所者の多くは学歴が高くないために、短歌や俳句など定型表現が多数を占める。台湾ならではのハンセン病文学は、台湾人入所者が創作したものであるが、彼らも日本語による作品を残していた。
　研究期間の後半では、何人かの入所者に焦点をしぼり、個性あふれる文学創作の分析を重点的に行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究課題は、そもそも植民地台湾のハンセン病文学とはどのようなものか、という初歩的な問いから始まった。日本における従来のハンセン病文学研究は、基本的に日本「内地」のテクストしか対象としておらず、台湾など植民地のテクストは視野の外に置かれている。
　一方でこれまでの台湾文学研究も、ハンセン病患者の創作を対象としたことはない。近接するいずれの学問領域からも、植民地のハンセン病文学は正面から論じられたことはなく、本研究の成果によって、ハンセン病認識に新たな視座を提供することが可能になった。

研究成果の概要（英文）：　This study collects, analyzes, and discusses the literary creations of people affected by leprosy produced in Taiwan during the Japanese colonial period, focusing on "Manjuka," the most important source material. As with leprosy literature in the interior, most of the patients did not receive advanced education, and the majority of their writings are formulaic expressions such as tanka and haiku. Although the leprosy literature specific to Taiwan was written by Taiwanese patients, some works in Japanese remained.
　During the second half of my research period, I focused on several patients and analyzed their unique literary works.

研究分野：台湾文学

キーワード：植民地　ハンセン病　台湾　楽生院　『万寿果』

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

1996 年に「らい予防法」が廃止され、90 年に及ぶハンセン病患者の隔離政策に終止符がうたれた。2001 年、熊本地方裁判所は「らい予防法」が違憲であることを認める判決をくだす。熊本地裁の判決の翌年に、厚生労働省は「ハンセン病問題に関する検証会議」を設置し、長年にわたる国策の誤りを検証することになった。

こうした大きな流れを受けて、社会学や歴史学、文学研究などさまざまな学問領域で、近代日本のハンセン病政策を再考しようという動きが強まっている。

本研究課題である文学研究の領域では、療養所に収容された患者の短歌を丁寧に読み解いた内田守人『生まれざりせば』（春秋社、1976）や杉野浩美の『いのちつきるまで』（皓星社、2010）などの先行研究がある。さらに「ハンセン病療養所の自己表現史」という副題を持つ荒井裕樹の『隔離の文学』（書肆アルス、2011）は、北條民雄や小川正子の作品だけでなく、療養所患者の戦争詩も論じた見逃せない著作である。

研究書ではないが、2002 年に刊行が始まった『ハンセン病文学全集』（皓星社）は、小説や詩・短歌・俳句だけでなく、評論や随筆・児童文学も視野に入れた重要な著作である。

しかしこれらの先行研究において、日本の植民地であった台湾のハンセン病文学はまったく論じられていなかった。全 10 巻におよぶ『ハンセン病文学全集』にも、植民地で創作されたテクストは収録されていない。

一方で台湾におけるハンセン病研究もさほど量は多くないが、陳威彬の修士論文「近代台湾的癩病與療養－以楽生療養院為主軸」（清華大学歴史研究所、2001）は、清代から戦後までの台湾におけるハンセン病の歴史を通史的に論じつつ、総督府が設立したハンセン病療養所の楽生院について記述したものである。さらに総督府のハンセン病政策を検討した范燕秋の「癩病療養所與患者身分的建構」（『台湾史研究』2008）や「楽生療養院與台湾近代癩病医学研究」（『台湾史研究』2014）も植民地期の楽生院を扱っているが、収容された患者の内面を表現した文学作品は考察の対象となっていない。

こうした先行研究を振り返ると、植民地台湾で創作されたハンセン病文学に関する先行研究は存在しない。本研究課題は、この「空白」に取り組むことで、ハンセン病（文学）研究に新たな知見をもたらすことを目指した。それは単に研究の「穴埋め」ではなく、近代日本のハンセン病政策が植民地にもたらしたものを再考することを目的としていた。

２．研究の目的

楽生院の患者「吉川次郎」が 1937 年に詠んだ「国語をば解せぬ友あはれ指なき手を口にあてつゝさみしくも笑む」という短歌がある。注目したいのは「国語をば解せぬ友」という一節だ。日本内地の療養所で、「国語」すなわち日本語を理解しない「友」が詠まれることはない。つまりこれは植民地の療養所ならではの一首なのである。

台湾人の短歌も残されている。台湾人入所者「余丙炭」が日本語で創作した短歌「新らしき病友のバス近づきぬわれ等が叫ぶ万歳の中に」は、1930 年代半ばの無癩州運動を背景としたものだ。こうした作品も「内地」のハンセン病文学には見られない表現である。

戦前の楽生院では、短歌のほかにも小説や詩・俳句・漢詩など多様なジャンルのテクストが患者によって創作されていた。書き手は日本人だけでなく台湾人もいる。創作言語も日本語のほかに、台湾語による定型詩や伝統的な漢詩もある。彼らは楽生院で刊行された雑誌『万寿果』だけでなく、院外の雑誌にも積極的に投稿していた。

「研究開始当初の背景」で述べたように、これまでの日本におけるハンセン病文学研究は、植民地の作品を全く視野に入れてこなかった。一方で、従来の台湾文学研究も、ハンセン病患者のテクストを対象にしたことがない。本研究課題が中心に扱う『万寿果』は、1930 年代半ばから 40 年代初期にかけて刊行された文芸雑誌であり、同時期の台湾では稀な長寿雑誌であったにも関わらず、それが扱われることはこれまでなかったのである。

本研究は、これまでその存在すら指摘されることのなかった植民地台湾のハンセン病文学を初めてテーマに据え、その全体像を明らかにすることを目標とした。

３．研究の方法

本研究の遂行にあたって、基礎的な資料収集から始める必要があった。1934 年に総督府のハンセン病療養施設「楽生院」の職員によって刊行された雑誌『万寿果』には、日本人・台湾人患者の文学創作が数多く収録されているが、国立台湾図書館（前身は台湾総督府図書館）にも欠号が多く、1939 年６月号までしか所蔵していない。しかし申請者は国立療養所長島愛生園（岡山県瀬戸内市）の神谷書庫に、1944 年２月号まで保管されていることを確認し、台湾に所蔵されていない部分の複写を行った。そのうえで雑誌の書誌を整理し、誰が、どのような作品を、いつ発表したのかという基礎的なデータを作成した。

本研究機関では、この『万寿果』の分析を通じて、雑誌そのものの研究やそこに掲載された短歌の分析、主な執筆者についての基礎的な研究を行った。

４．研究成果

本研究期間に、雑誌論文を５本、単行本収録論文１本執筆し、学会発表を７回（うち国際学会は４回）行った。

新型コロナウイルスの流行のため、初年度以降は他機関を訪れて資料収集を行うことがほとんどできなかったが、長島愛生園で『万寿果』の収集を終えていたために、必要最小限の材料をもとに研究の遂行が可能となった。なお欠号は残るものの、今日まだ残っている『万寿果』はほぼ入手できたのは大きな収穫である。なお 2022 年には不二出版から同誌の復刻版が刊行されることが決まっており、申請者がその解説を執筆することになっている。

研究期間では、まず植民地台湾におけるハンセン病政策を理解するとともに、楽生院で創作された文学についての概要についての理解を深めるよう努めた。その最初の成果が中国文芸研究会の機関誌である『野草』第百号に掲載された「植民地台湾の「癩短歌」を読む―楽生院慰安会『万寿果』を中心に」である。入所者の多くは教育に恵まれず、彼らが内面を表現する手段として選択したのは短歌や俳句などの短詩型文学であった。

戦前のハンセン病およびその文学を考える際の前提は、特効薬のない「不治の病」とみなされていたことと、この病気が「国辱」視されていたことである。ハンセン病問題の「解決」は、あらゆる患者を療養所に収容し、彼らの死を以て完成するものとされていた。当然ながら入所者たちもそのような視線を意識し、それを内面化する者も多かった。自らの速やかな死によって国土の「浄化」も早められるという認識の産物が、ハンセン病文学だった。しかし『万寿果』が 1930 年代半ばから 40 年代にかけて刊行されたように、台湾のハンセン病文学は拡大する一方の戦争期とも重なっていた。楽生院に入所した日本人男性患者たちは、病ゆえに戦争に参加できない自らのふがいなさをしばしば短歌で表現するようになる。また日中戦争に懐疑的な台湾人入所者に対する高圧的な視線も、その創作から読みとることができる。

また台湾の療養所ならではの文学として、台湾人入所者の創作があげられる。「内地」の療養所には存在しないこの独特な文学については、台湾大学台湾文学研究所が開催した国際学術シンポジウム「第三屆文化流動與知識伝播―台湾文学與亜太人文的在地、跨界與混雑」で「閲読殖民地台湾的「癩文学」―以雑誌《萬壽果》為中心」という発表を行い、後に査読論文として台湾大学台湾文学研究所の紀要『臺灣文學研究集刊』第 22 号に掲載された。

研究期間の初期段階で、植民地台湾におけるハンセン病文学に関する大まかな把握を行った後で、徐々にその中の個々の入所者に焦点を当てた研究を行った。ハンセン病者への「聞き取り」を長年行ってきた蘭由岐子は、「『異口同音』の『異口』」に着目し、「病者ひとりひとりがハンセン病という病いを生きたそのことの意味を「ひとまとめ」（好ましくない表現を使うとすれば、（「十把一絡げ」）にせず、病者個人のおのおのの経験に降り立ち、その細部を「異口」のまま残」すことの重要性を説いている（蘭由岐子『「病いの経験」を聞き取る［新版］』生活書院、2017 年）。日本台湾学会で発表し、その後に『日本台湾学会報』に掲載された 2 本の論文「植民地台湾の「癩文学」を読む―宮崎勝雄のテクストを中心に」と「小崎治子の「癩短歌」を読む―頂坡角から武蔵野へ」は、そうした問題意識に基づき、ハンセン病文学から「異口」を読みとろうとした試みである。

また 2019 年に一橋大学大学院言語社会研究科の韓国学研究センターと韓国の延世大学校近代韓国学研究所ＨＫ+事業団が開催した「第１回国際学術シンポジウム　人文学研究の知的基盤省察と東アジア学－近代学問と知識人」の報告をもとに執筆した「『療養秀歌三千集』を読む」は、1940 年に内田守人が編集した『療養秀歌三千集』という結核患者とハンセン病者の短歌集を取り上げ、植民地台湾のハンセン病患者の創作を論じた。

2021 年 3 月に発表した論文「救癩戦線は「御歌」とともに―『万寿果』文芸特輯号を読む」は、植民地におけるハンセン病文学を、同時期の日本帝国のハンセン病文学のなかに置き、その影響関係や異同を考察することを意識して追求した論文である。植民地のハンセン病文学を帝国の文学のなかで読み解くという問題意識は、新たな科学研究費補助金の申請課題「日本植民地期の台湾におけるハンセン病文学に関する発展的研究（22K00360）」となり、2022 年度からさらに一歩進んだ研究が行えるようになった。

まだ論文にはなっていないが、帝国規模でのハンセン病文学から植民地のそれを考察するという問題関心から、2021 年にオンラインで開催された東アジア日本研究者協議会第 5 回国際学術大会で、「帝国を移動する―青山純三とその軌跡」という報告を行った。山梨県に生まれた青山は、若くしてハンセン病を発症。多くのハンセン病者が集まっていた群馬県の草津でホーリネス教会の洗礼を受ける。やがて朝鮮のハンセン病療養所である小鹿島に派遣され、朝鮮人入所者に布教を行うとともに独力で雑誌を刊行していた。小鹿島の療養所の所長が交代し、キリスト教に不寛容な措置が取られるなか、彼は岡山県の長島愛生園に移籍する。同園で患者の待遇改善を訴える長島事件が起こる中、青山は首謀者のひとりと目され、事件後に台湾楽生院への移動を余儀なくされた。1937 年に楽生院にやって来た青山は、『万寿果』に数多くの短歌や文学評論、さらに雑誌そのものの編集作業も行うようになる。日本敗戦を目前として彼は亡くなってしまうが、帝国領内を移動し続けた青山純三の活動は、今日に至るまでまったく知られていない。

本研究期間においては、そうした青山の文学創作を論文にすることはできなかったが、2022 年度から始まる「日本植民地期の台湾におけるハンセン病文学に関する発展的研究（22K00360）」で、最初にまとめるべき課題となった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 星名宏修	４．巻 15
２．論文標題 救癩戦線は「御歌」とともに　『万寿果』文芸特輯号を読む	５．発行年 2021年
３．雑誌名 言語社会	６．最初と最後の頁 169-186
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 星名宏修	４．巻 21
２．論文標題 植民地台湾の「癩文学」を読む―宮崎勝雄のテクストを中心に	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本台湾学会報	６．最初と最後の頁 108-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 星名宏修	４．巻 22
２．論文標題 1930年代植民地台湾の「癩文学」を読む　雑誌『萬壽果』における本島人の作品を中心に	５．発行年 2019年
３．雑誌名 臺灣文學研究集刊	６．最初と最後の頁 71-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 星名宏修	４．巻 667
２．論文標題 『療養秀歌三千集』を読む	５．発行年 2020年
３．雑誌名 立命館文學	６．最初と最後の頁 206-218
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 星名宏修	4．巻 23
2．論文標題 小崎治子の「癩短歌」を読むー頂坡角から武蔵野へ	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本台湾学会報	6．最初と最後の頁 105-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　3件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 星名宏修
2．発表標題 「頂坡角から武蔵野へ　小崎治子の「癩短歌」を読む」
3．学会等名 日本台湾学会
4．発表年 2020年

1．発表者名 星名宏修
2．発表標題 植民地台湾で癩を病む／詠む
3．学会等名 人文学研究の知的基盤省察と東アジア学－近代学問と知識人（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 星名宏修
2．発表標題 救癩戦線は御歌とともに　1940年代の『万寿果』を読む
3．学会等名 中国文芸研究会
4．発表年 2019年

１．発表者名 星名宏修
２．発表標題 閲読殖民地台湾的「癩文学」－以雑誌《萬壽果》為中心
３．学会等名 「第三屆文化流動與知識伝播－台湾文学與亜太人文的在地、跨界與混雑」国際学術研討会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 星名宏修
２．発表標題 植民地台湾の「癩文学」
３．学会等名 「平和」の共通概念の構築は可能か（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 星名宏修
２．発表標題 帝国を移動するー青山純三とその軌跡
３．学会等名 東アジア日本研究者協議会第5回国際学術大会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 星名宏修
２．発表標題 植民地台湾の「癩文学」を読む－宮崎勝雄のテクストを中心に
３．学会等名 日本台湾学会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 藤井得弘・星名宏修・中野徹・高橋俊・上原かおり・津守陽・田村容子・城山拓也・松村志乃・阿部沙織・大野陽介・河本美紀・豊田周子・張文菁・松浦恆雄	４．発行年 2018年
２．出版社 研文出版	５．総ページ数 415
３．書名 中華文藝の饗宴―『野草』第百号	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関